



Title	漢籍古鈔本における漢字音の基礎的研究：鎌倉・南北朝時代加点の經書類を中心に [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	鄭, 門鎬
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14569号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81133
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Munho_Jung_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 鄭 門 鎬

学位論文題名

漢籍古鈔本における漢字音の基礎的研究
—鎌倉・南北朝時代加点の経書類を中心に—

・本論文の観点と方法

本研究は日本漢字音において、大きな根幹を為す字音の層である呉音と漢音のうち、漢音にその焦点を当てたものである。諸典籍の中でも、特に儒教経典（経書類）をはじめとする漢籍は、漢音で読まれることが通例である。特に、経書類はその学習の背景には陸徳明撰の『經典釈文』により、字句の音・義・形などの内容的な側面が支えられる。そのため、他の典籍よりもその規範性がより強く、いうまでもなく漢字音の領域も然りである。本研究は、鎌倉時代から南北朝時代まで約 200 年間に書写・加点された経書類の古鈔本を対象として、各資料に施されている仮名音注・声点・反切注および同音注といった漢字音を示すための注記（以下、漢字音注記）を分析するものである。

・本論文の内容

本研究の目的は、まず、同典籍間にも資料別・加点者の所属する集団（学派・宗派）ごとに加点・表記の差が存することを、より顕著に明示することである。次に、非規範的である字音についても検討し、その出現の傾向と原因についても考察する。さらに、日本漢字音研究の一助とするため、漢音研究の基礎的なデータを分韻表として作成し、公開する。

資料の選定基準としては、同典籍に対して加点が施されている資料が多数遺存しており、異本間の相互比較が可能なものとする。その上また相異なる集団が同典籍に関わっているものが確認できる資料に焦点を当てる。その対象典籍としては、『論語（集解）』『（古文）尚書』『孝経』の 3 種の典籍がこれらの基準に符合する。本研究で用いた資料は全 21 種であり、その中には都合 24,017 字の被注字が存する。

漢字音注記の分析に当たっては、複数の加点資料の中から漢字音注記を抽出し、被注字を分紐分韻することによりデータを作成する。既存の研究において、『広韻』未収録字は、分析および分韻表の外枠のものとして扱われてきた。ところが、陸徳明撰『經典釈文』所収の異体字に関する注文ならびに、現存の韻書・字書などを利用して、未収録字が『広韻』収録字と同音・同義（異体関係）であることが確実であると証明可能な字に関しては、なるべく『広韻』の収録字に包摂するように努めた。そして、各資料の各漢字音注記を分析するため、漢字音注記別に一定の基準を設けた。まず、仮名音注に関しては、漢音の母胎音における問題と日本語の音韻の変化の側面から、①非鼻音化の遅れ、②歯音字における表記の揺れ、③合口字の表記、④ハ行転呼音による混同、⑤「㊦ヨウ」と「㊧ウ」の混同、⑥長母音表記、⑦m・n 韻尾字の表記、⑧促音化、⑨t 韻尾の仮名表記、⑩呉音・百姓読みの混入の 10 項目の分類を設けて分析を加えた。次に、声点の分析は漢音声調の特徴に即して、①軽声点の加点、②上声全濁字の去声化、③濁声点の加点、④非規範的な声点の 4 項目の分析方法を用いた。最後に、反切注および同音注は、現存の通志堂本『經典釈文』を基準に各資料に書き込まれている注記との異同が存する具体例を挙げ、各資料に引用されている『經典釈文』の音注と現存本との差とその傾向を述べるとともに、直接引用の多寡について検討した。

本論文の構成は大別して、研究篇と資料篇の 2 部で構成されている。

まず、研究篇の第 1 章では本研究に至るまでの動機と近年の研究の流れを述べるとともに、研究の目的について概説した。なお、本研究にも用いられた訓点資料に基づく帰納的な日本漢字音研究に至るまでの近代以降の研究史の流れを概観した。

第2章では、本論文において用いられる資料の選定方法およびその理由、各資料に施されている漢字音注記の分類方法およびデータ作成方法について述べた。各注記の分析方法は、上記したとおり、仮名音注10項目、声点4項目、『經典釈文』との対応の15項目としたことを、先行研究を交えながら、詳論した。

本論である、第3章から第5章までは、各々『論語』鈔本7種、『尚書』鈔本5種、『孝經』鈔本9種を用いて、各章において典籍内部の異本間の差について論じる。各章の冒頭では、各典籍を用いた漢字音研究について通覧し、第1節では、本研究で使用する資料の概略を述べるとともに、加點の性格から学派別に大別した。第2節では、仮名音注の表記の揺れについて述べた。第3節では声点を漢音声調の特徴に照らし合わせて、各資料の傾向を分析した。第4節では、反切注および同音注の書き込みについて、通志堂本『經典釈文』との対校を通じて、その差について述べた。各漢字音注記については、上記に述べた如く分析の基準をもって、具体的な事例を挙げながら、その傾向を図表化することにより表すが、各表は年代の順序と学派別（清原家・中原家）に区分した。なお、各典籍内で得られた結果を第5節の小結にて略述した。

第6章は、本研究に用いた21種の資料から得られた結果を総合し、各漢字音注記の分析の基準から得られた結果を略述した。

資料篇においては、第1章に本研究で用いられた21種の典籍に施されている声点の広韻対照表を挙げ、各資料の訓点の種類ごとの傾向を示した。第2章には『論語』『尚書』『孝經』鈔本から得られた漢字音注記の全例を分韻表として整理した。